２　他校との合同学習を通して児童の伝える力を高める指導に関する研究

ー遠隔合同授業の伝え合う活動における学習過程の工夫を通してー

１　研究の意図
(1) 研究の背景
(2) 研究テーマ設定の理由
(3) 研究の仮説

２　研究の内容
(1) 本研究における「伝える力」について
(2) 遠隔合同授業の授業形態について
(3) 学習過程の工夫について
ア　伝え方の工夫を話し合う活動
イ　自他の表現を比較する活動
ウ　伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動
(4) 検証方法
(5) 授業実践
ア　第１回授業実践
(ｱ) 単元の概要
(ｲ) 授業の実際
a　伝え方の工夫を話し合う活動
b　自他の表現を比較する活動
c　伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動
(ｳ) 授業実践の結果と考察
a　児童の振り返りの記述の分析
b　児童の発話・行動記録の分析
c　表現物の分析
(ｴ) 第２回授業実践に向けて
イ　第２回授業実践
(ｱ) 単元の概要
(ｲ) 授業の実際
a　伝え方の工夫を話し合う活動
b　自他の表現を比較する活動
c　伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動
(ｳ) 授業実践の結果と考察
a　児童の振り返りの記述の分析
b　児童の発話・行動記録の分析
c　表現物の分析
(6) 研究の成果と考察

３　研究のまとめと今後の課題
(1) 研究のまとめ
(2) 今後の課題

防府市立小野小学校

教　諭　　田　中　啓　一

他校との合同学習を通して児童の伝える力を高める指導に関する研究
－遠隔合同授業の伝え合う活動における学習過程の工夫を通して－

防府市立小野小学校　教諭　田中　啓一

1　研究の意図

(1) 研究の背景

「小学校学習指導要領（平成29年告示）」では、学習の基盤となる資質・能力として情報活用能力を挙げ、その育成を図るため学習活動の充実を図ることと述べられている。第３期教育振興基本計画では、情報活用能力の一つとして、「受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」*[1]が挙げられており、その育成方法の一つとして、「多様性ある学習や専門性の高い授業等を実現させる観点から，遠隔教育の推進を図る」*[2]ことが示されている。

(2) 研究テーマ設定の理由

昨年度、原籍校での４年生社会科の授業において、地域について調べて伝え合う活動を、防府市立大道小学校（以下「相手校」という。）４年生と遠隔合同授業により行った。原籍校の児童からは、遠隔合同授業を楽しむ姿が見られた。また、相手校の児童の多様な考えや思いに触れ、新たな気付きや発見をする姿も見られた。しかし、原籍校の児童が説明した内容について相手校の児童から再度質問されることが多く、発表内容を十分に相手校の児童へ伝えられなかったという課題が残った。学習過程において伝える力を高めるための教師の手立てが不十分であったことが要因の一つだと考える。

倉田は、遠隔合同授業について「普段話したことのない相手へ発表する中でどうやれば相手に伝わりやすいだろうと創意工夫することが，子供の学習意欲向上や表現力向上につながります」*[3]「教師と子供のやりとりだけでなく，子供どうしのやりとりも非常に重要です」*[4]と述べている。原籍校の児童が相手校の児童とやり取りを行う中で、伝える力を高めていくためには、教師の支援の仕方を工夫することが必要であると考えた。

そこで、本研究では、遠隔合同授業での伝え合う活動において、相手に分かりやすく伝えようとする意欲や態度を育み、児童の伝える力を高めることをめざす。そのための手立てとして、原籍校と相手校とで、児童に身に付けさせたい伝える力を「みんなで作る伝える力」として共有する。「みんなで作る伝える力」は、相手に分かりやすく伝えるための工夫をまとめたものである。両校の児童が話し合ったことを原籍校の教師がまとめ、その後の話合いで児童から出た分かりやすく伝えるための工夫について、両校の教師がクラウド上で共有するデータを共同編集する。これを授業の中で教師が全体に提示して確認したり、児童が活動の中で必要に応じて自ら確認したりできるようにする。また、学習過程の工夫として、「伝え方の工夫を話し合う活動」「自他の表現を比較する活動」「伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動」を設定する。これらの手立てを講じることで、児童の伝える力を高めることができると考えた。

(3) 研究の仮説

遠隔合同授業の児童同士が伝え合う活動において、両校で児童に身に付けさせたい力を共有し、学習過程を工夫しながら振り返り活動を継続的に行っていくことにより、相手に分かりやすく伝えようとする意欲や態度を育み、伝える力を高めることができる。

２　研究の内容

⑴　本研究における「伝える力」について

本研究における「伝える力」とは、「自分の伝えたいことを、相手を意識して分かりやすく伝えることができる力」と捉え、学習過程の中で、児童が伝える力が身に付いているかを振り返りながら、相手に伝わっているかを意識した表現の工夫ができるようにした。

⑵　遠隔合同授業の授業形態について

遠隔合同授業は、「他校の教室とつないで、継続的に合同で授業を行うことで、多様な意見にふれたり、コミュニケーション力を培ったりする機会を創出する」*[5]授業である。本研究では、授業形態を同期型と非同期型に分類して実践を行った（**表１**）。

表１　同期型と非同期型の授業形態

同期型	遠隔教育システムを使って、直接画面を通してリアルタイムでやり取りを行う授業
非同期型	リアルタイムでやり取りは行わないが、クラウド上で継続的なやり取りを行う授業

同期型と非同期型を組み合わせることで、常に同じ時間にやり取りをしなくても、相手意識をもち続けた学びを実現することが可能となる。

⑶　学習過程の工夫について

原籍校の教師と相手校の教師で共通理解を図り、両校で三つの学習過程の工夫を行った。

ア　伝え方の工夫を話し合う活動

児童に身に付けさせたい伝える力を「みんなで作る伝える力」としてまとめ、両校の児童と共有して活用する。児童が発表で使用する新聞や資料などの表現物を作成する際に工夫したいと考えていることを基にして、両校の教師がクラウド上で共同編集して蓄積する（編集権限は教師がもち、児童は閲覧のみ）。この活動により、１校だけでは見付けられなかった伝え方の工夫が相手校の考えを参考にして生み出されると考えた。

イ　自他の表現を比較する活動

表現物を見ながら質問や感想をコメントしたり、直接質問や感想を伝え合ったりする。そうすることで、表現の仕方について新たな気付きや発見をするとともに、相手からの気付きを基によりよい表現になるように進んで工夫・改善できると考えた。

ウ　伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動

自分の伝える力の高まりを児童が自覚できるように、毎時間の終末に振り返りの活動を設定する。終末には、「今日の学習で意識したこと」について記述したワークシートを１人１台端末で撮影し、共同作成・編集のツール（以下「共同ツール」という。）に保存させる。それにより、過去の自分の振り返りを見返したり、友達の振り返りを見たりすることができる。また、表現物についても、「みんなで作る伝える力」の項目と照らし合わせながら、伝わり具合を児童自身に振り返らせることで、伝える力の高まりが自覚できると考えた。

⑷　検証方法

授業実践において、児童の振り返りの記述や発話・行動記録、表現物から、相手に分かりやすく伝えようとする意欲や態度を見取り、児童の伝える力の高まりについて検証する。また、２回の授業実践後に実施するアンケート（感想の記述）からも同様に検証する。

⑸　授業実践

原籍校４年生15人と相手校４年生24人の児童を対象に行った。第１回授業実践は６・７月に国語科で、第２回授業実践は９・10月に社会科で、同期型と非同期型の授業形態を組み合わせて実践した。また、先に述べた三つの学習過程の工夫を取り入れた。

ア　第１回授業実践

(ｱ) 単元の概要

国語科「事実を分かりやすくほうこくしよう　－新聞づくり－」（全12時間）の実践を行った。

本単元のねらいは、自分の学校や地域について取材したことを新聞で表現し、感想を伝え合うことでよりよい表現の仕方を捉えられるようにすることである。新聞づくりの班は、全10班（１班４人程度：原籍校４班、相手校６班）で構成した。そして、自他の新聞を比較し、よりよい表現の仕方を見出すことを目的として、作成した新聞を相手校の児童と互いに見合って、感想を伝え合う場を設定した。

以下、単元の概要を**表２**に示す。

表２　単元の概要　（ ⋰ の箇所は「同期型」で実施）

時	主な学習活動	学習過程の工夫	授業形態
1	**学習目標を確認し、学習計画を立てる。**		**同期型**
2	新聞を作る上で大切なことを話し合う。 グループを決める。	話 新聞を作る際に工夫することを「みんなで作る伝える力」にまとめる。【随時】 振 振り返りの記述を写真で撮影して共同ツールに保存し、共有する。【全時間】	非同期型
3	教科書を読み、新聞の作り方の手順や取材方法を確かめる。		
4 5 6	取材を行い、取材したことの中から記事を書くときに使うものを選ぶ。		
7	トップ記事を決め、割付について話し合う。		
8 9	記事の下書きを書き、伝えたい内容に合った見出しの案を考える。		
10	グループで下書きを読み合い、推敲する。 見出しを決める。		
11	清書をし、新聞を仕上げる。 出来上がった新聞を読んでコメントをする。	比 相手校の新聞を共同ツールで見て比べ、感想をコメントする。	
12	**完成した新聞を読んだ感想を伝え合う。** **（相手校１班、２班、…、６班、** **原籍校１班、２班、…、４班の順）**	**比 画面越しに直接相手校に対しての感想を伝え合う。** **振 自分たちが作った新聞の伝わり具合を、「みんなで作る伝える力」を使って振り返る。**	**同期型**

話 ・・・ 伝え方の工夫を話し合う活動　　比 ・・・ 自他の表現を比較する活動

振 ・・・ 伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動

(ｲ) 授業の実際

同期型の授業は、１時間目と12時間目の２回実施した。１回目の同期型の授業では、両校で共同ツールを使い、相手の学校や地域について知っていることを出し合うことで、同じ防府市内であっても、相手校のことや、その地域のことについては、よく知らないという事実に気付くことができた。そこで、相手校へ自分たちの学校や地域について新聞で伝えるという単元のゴールを設定し、見通しをもたせて学習を展開できるようにした。

２回目の同期型の授業では、新聞を読んだ感想を相手校の児童へ画面越しに直接伝える活動を行った。学習過程の工夫として行った三つの活動について、以下、順に記述する。

a　伝え方の工夫を話し合う活動

伝え方の工夫を話し合う活動は、２時間目から９時間目で実施した。自分たちが行った伝え方の工夫に注目するために、複数の新聞を見比べる活動や、取材した中から伝えたいことを明確にするための話合いをした。伝え方の工夫について出てきた考えは、児童と教師で協議したものを、両校の教師がその都度「みんなで作る伝える力」に加筆修正を行った。その内容を授業の中で確認することで、相手に伝わるための工夫を意識で

きるようにした。また、児童が使うワークシートの中にも入れ、常に伝え方の工夫を確認できるようにした。第１回授業実践で作成した「みんなで作る伝える力」を**表３**に示す。

表３　みんなで作る伝える力（第１回授業実践後）

相手のことを意識する	相手に伝わる表現の工夫
・相手が読める字を書く。（きれいな字を書く。） ・相手の気持ちになって書く。 ・相手のこと（意見など）を聞いて書く。	・文字の大きさや太さを考える。 ・絵や図、写真、表などを入れる。 ・くわしく書く。 ・見出しを工夫する。 ・分かりやすい情報を書く。 ・バランスのよい配置（わりつけ）にする。6/28 加筆 ・見出しに伝えたいことをまとめる。7/4 加筆 ・事実を書く。7/4 加筆

b　自他の表現を比較する活動

自他の表現を比較する活動は、11時間目に非同期型で、12時間目に同期型で行った。11時間目では、共同ツールに保存された相手校の新聞を読み、自分たちの作成した新聞と比べながら、相手校の新聞に対して良い点や分かったことを共同ツールを用いてコメントするようにした（**図１**）。

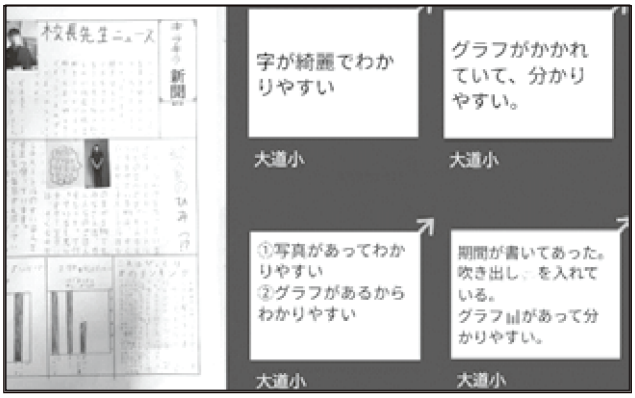

図１　共同ツールにおけるコメントの一部

２回目の同期型である12時間目には、全ての班の新聞に対しての感想を画面越しに直接相手校の児童に伝える活動を行った。相手校の児童から表現のよさを伝えてもらうことで、伝わりやすい表現の仕方に気付くことができた。

c　伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動

２回目の同期型である12時間目には、画面越しに直接感想を伝える活動を行った後に、自分たちの新聞の伝わり具合について振り返りを行った。「みんなで作る伝える力」と相手校から直接もらった感想や共同ツールを用いて書き込まれたコメントを参考にして、自分たちの新聞の良い点を児童一人ひとりに考えさせ、班で意見を共有した。その上で、自分たちの新聞が更に伝わりやすくするために「みんなで作る伝える力」や相手校の新聞の良かった点を見返しながら、改善点を話し合った。

(ｳ) 授業実践の結果と考察

a　児童の振り返りの記述の分析

38人中37人の児童から、伝える意欲の高まりに関する記述の変容が見られた。そのうちの一人であるＡさんの記述の変容を**図２**に示す。Ａさんは、１時間目は、伝えることに対しての意欲がほとんど記述されていなかったが、４時間目では、記述する量が増えるとともに、アンケートを取る相手の学年を意識していることが分かる。さらに、12時間目では、相手校の良い点や参考としたいことにも言及しており、その記述から、伝える意欲が学習活動を重ねるごとに高まって

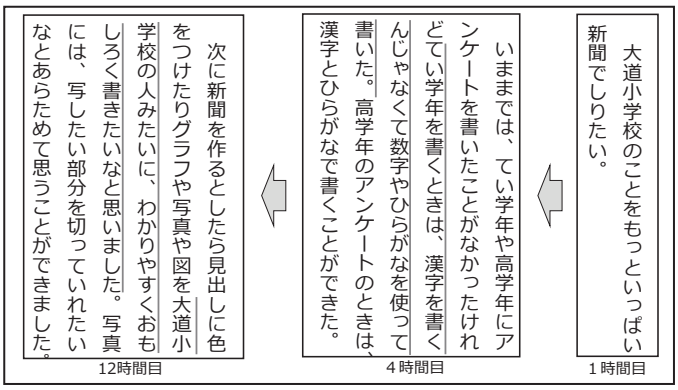

図２　Ａさんの振り返りの記述の変容

いることが見て取れる。

また、変容を客観的に見取るために、テキストマイニングによる分析を行った。分析には、KH Coder3を用いた（参考：樋口耕一の開発した日本語テキスト型データ分析システム）。

抽出語の分析については、固有名詞を除いた出現回数が５回以上の抽出語を取り出した。２回目の同期型である12時間目（**表５**）は、１回目の同期型の１時間目（**表４**）と比べて、抽出語の数と合計回数がいずれも2.4倍に増加した。また、上位に「字」「大きい」「写真」が見られた。この語句は、「みんなで作る伝える力」に出てきた表現の工夫につながるものである。これらから、伝える意欲が学習が進むにつれて高まったと考えられる。

共起ネットワークの分析については、「相手」と表現の工夫が表出する「分かる」「書く」の関係に注目した。共起ネットワークとは、「よく一緒に使われている語同士を，線で結んだネットワーク」*6のことであり、実線でつながった語句同士は点線でつながった語句同士より結び付きが強いとされている。

１回目の同期型の１時間目（**図３**）は、「相手」につながりが強い語として、「小学校」「分かる」などがある。相手や相手の小学校のことを知りたい思いが強いと考えられる。「分かる」と「書く」のつながりは弱い。「書く」は、「新聞」「作る」などとつながりが強いが、「字」「大きい」などはつながりが弱く、表現の工夫への思いが弱いことが読み取れる。２回目の同期型の12時間目（**図４**）は、「相手」につながりが強い語として、「小学校」「改善」「思う」などがある。１時間目にあった「知る」はなくなり、「分かる」も離れた場所になっている。相手校の児童のために、改善しようとする思いが表出されたと考えられる。

表４　１時間目の振り返り記述の抽出語

N＝38［原籍校(n=15)，相手校(n=23)］

	抽出語	数		抽出語	数		抽出語	数
1	新聞	30	6	自分	18	11	図	8
2	小学校	29	7	分かる	16	12	大	8
3	相手	25	8	知る	13		（省略）	
4	書く	21	9	写真	11	16	文字	5
5	作る	18	10	絵	8			

抽出語　16語句　　合計回数　231回

表５　12時間目の振り返り記述の抽出語

N＝38［原籍校(n=15)，相手校(n=23)］

	抽出語	数		抽出語	数		抽出語	数
1	書く	66	6	作る	24	11	改善	18
2	新聞	48	7	相手	23	12	次	18
3	字	29	8	思う	22		（省略）	
4	大きい	26	9	分かる	22	39	良い	5
5	写真	25	10	小学校	19			

抽出語　39語句　　合計回数　554回

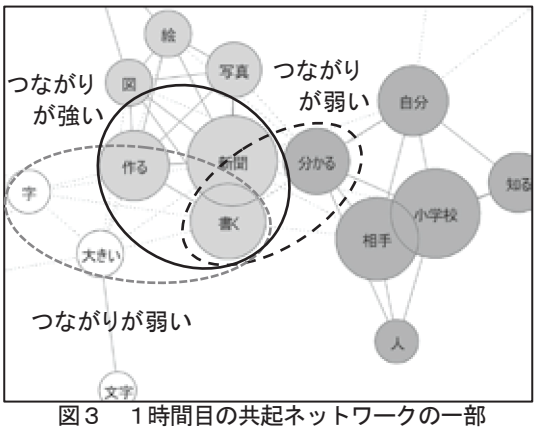

図３　１時間目の共起ネットワークの一部

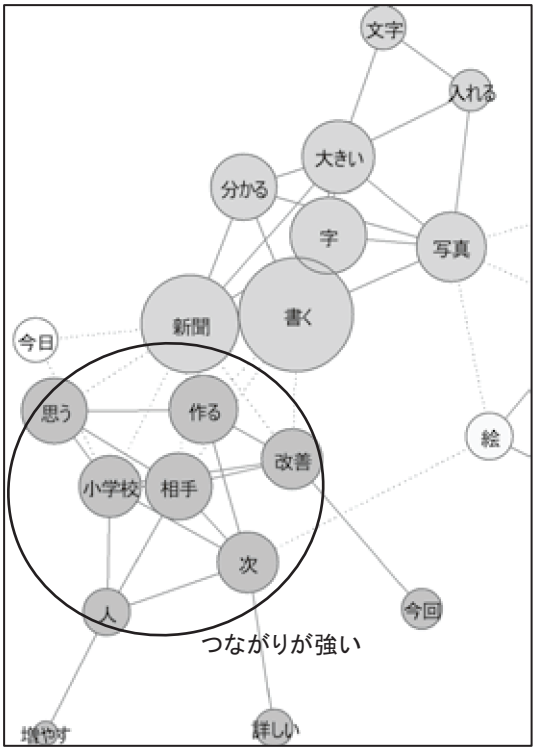

図４　12時間目の共起ネットワークの一部

このことから、始めは相手を知りたい思いが強かったが、単元の終わりでは相手によりよく伝えようとする思いが見られるようになったこと、相手に正確に情報を伝えようとする意欲が芽生えてきたことが推察される。

b　児童の発話・行動記録の分析

２回目の同期型である12時間目の児童の様子から分析した。

図５は、最初に行った相手校１班の新聞に対して、原籍校の児童が感想を伝えたときのやり取りである。原籍校の児童の発表に対しての反応が見られないことが分かる。発表者の声が十分に聞こえておらず、教師が反応し、再度の発表を促していた。

図６は、相手校５班の新聞に対して原籍校の児童が感想を伝えたときのやり取りと、原籍校４班の新聞に対して相手校の児童が感想を伝えたときのやり取りである。両校の児童に対して、相手の発表への反応を返すよう促したところ、途中から少しずつうなずきやジェスチャーなどの反応をするようになった。また、**図５**の網掛け箇所で拍手をしたことでその音にマイクが反応し、声が聞こえなくなった経験から、一部の児童が音の出ない拍手をするようになった。教師が価値付けることで多くの児童が進んでするようになった。このことから、画面越しでのやり取りの特性を考えた反応の工夫を児童ができるようになったことが見取れた。しかし、児童の様子を見る限り、相手の発表に対する反応は十分とはいえず、相手を意識して聞くことにおいては課題が残った。また、伝える側も、再度の発言を促されることが多く、話し方にも改善の余地があることが分かった。

＜原籍校から相手校の新聞に対して感想を伝える活動：１班の時＞

Ｔ１:原籍校教師　Ｔ２:相手校教師　A:原籍校児童　B:相手校児童

Ｔ１　○○さん。
Ｔ２　聞いて。
Ａ　**エレベーターがあることが違っていて、あっていいなと思いました。**
Ｂ　（聞こえていないので反応がない。）
Ｔ２　聞こえないです。
Ｔ１　もう少し大きい声で、もう一回。
Ａ　**エレベーターがあることが違っていて、あっていいなと思いました。**
Ｂ　（反応しない）
Ｔ２　もう一回。
Ｔ１　○○さん、聞こえてないって。
Ａ　**エレベーターがあることが違っていて、あっていいなと思いました。**
Ｔ２　聞こえた？
「エレベーターがあることが違っていて、あっていいなと思いました。」だって。
しっかり、反応してあげて
Ｂ　（拍手をする。）★音をマイクが拾ってしまう。
※（ ）内は、その時に見られた行動　**下線**は、繰り返した発言

図５　伝える活動時の児童のやり取り（その１）

＜原籍校から相手校の新聞に対して感想を伝える活動：５班の時＞

Ｔ１:原籍校教師　Ｔ２:相手校教師　A:原籍校児童　B:相手校児童

Ｔ１　○○さん。
Ａ　**大道小学校の特別な行事のことが書かれていてよかったです。**
Ｂ　（指で１を出す児童がいる。）
Ｔ１　もう一回言って。
Ａ　**大道小学校の特別な行事のことが書かれていてよかったです。**
Ｂ　（数人うなずく、小さく音の出ない拍手をする児童がいる。）
Ｔ２　（音の出ない拍手を大きくやって見せている。）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＜相手校から原籍校の新聞に対して感想を伝える活動：４班の時＞

Ｂ　一つ一つの写真があって分かりやすいです。
Ａ　（うなずく、手で○を作る。）
Ｔ１　（手で○を作った児童にジェスチャーでＯＫをする。）
Ｔ２　○○さん。
Ｂ　**ランキングが書いてあって分かりやすかったです。**
Ａ　もう一度。（指で１を作って伝える。）
Ｂ　**ランキングが書いてあって分かりやすかったです。**
Ａ　（うなずく、音の出ない拍手をする児童がいる。）
※（ ）内は、その時に見られた行動　**下線**は、繰り返した発言

図６　伝える活動時の児童のやり取り（その２）

c　表現物の分析

第１回授業実践で作った新聞（**図７**）について、「みんなで作る伝える力」の項目を意識していることが見取れるかを分析した（**表６**）。見た目の表現につながる項目の「文字の大きさや太さを考える」は10班中７班、「絵や図、写真、表などを入れる」は全ての班が意識していた。しかし、内容に関する項目の「くわ

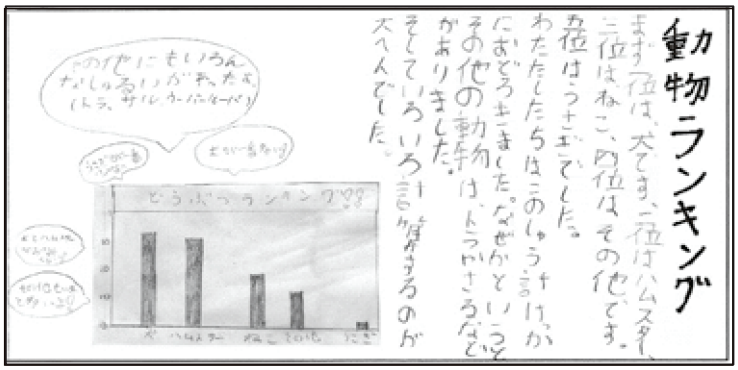

図７　児童が作成した新聞（一部抜粋）

表６　新聞についての分析結果

「みんなで作る伝える力」の項目	原籍校				相手校						計
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	
・文字の大きさや太さを考える。	○	○		○		○	○	○	○		7
・絵や図、写真、表などを入れる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10
・くわしく書く。	○	○			○				○	○	5
・分かりやすい情報を書く。					○						1

しく書く（相手に伝えるために必要な情報を入れて書いている）」は10班中５班、「分かりやすい情報を書く（相手が分かる言葉を用いている。相手に伝わる順序で書いている）」は10班中１班のみであった。このことから、見た目を工夫することへの意識は強いが、内容を詳しく伝えようとすることへの思いは弱いと推察される。

(ｴ) 第２回授業実践に向けて

第１回授業実践での課題を踏まえて、第２回授業実践では、書く力と話す力を一体的に高めることで、伝える力が更に向上することをめざす。そのために、調べた内容についてスライドを用いた音声を含む発表資料としてまとめる活動を単元の中に仕組んだ授業実践を行う。

イ　第２回授業実践

(ｱ) 単元の概要

社会科「きょう土の伝統・文化と先人たち　～残したいもの　伝えたいもの～」（全11時間）の実践を行った。国語科としての伝え方の工夫についての気付きを深めることと、社会科における表現する力を高めることの相乗効果が生まれることを期待し、社会科の単元の中に、国語科「調べたことをまとめてつたえよう」の導入１時間を位置付けて行う。

以下、単元の概要を**表７**に示す。

表７　単元の概要　　（ ⋱ の箇所は「同期型」で実施）

時	主な学習活動	学習過程の工夫	授業形態
1	**学習目標を確認し、学習計画を立てる。**		**同期型**
2	地域の伝統や文化について、地域の人へインタビューや見学・調査を行う。		非同期型
3	調べたことを基に発表資料を作成する。		
	関連教科（国語科） 自分たちの発表を見返し、工夫点やよさを出し合う。	話 発表資料を作成する際に工夫することを「みんなで作る伝える力」にまとめる。	
4	共同ツールで発表を見て、もっと知りたい点をコメントする。	比 相手の発表を共同ツールで見て、質問と感想をコメントする。	
5	**互いに質問し合う。また、自分たちの発表資料を改善するための計画を話し合う。**	**比 １人１台端末の画面越しに発表に対しての質問をし合う。** **振 発表の伝わり具合を、「みんなで作る伝える力」を使って振り返る。**	**同期型**
6	相手に十分に伝えられなかった点を再度調べ、発表資料を修正する。		非同期型
7	**修正された後の発表を見て、互いの地域の伝統や文化のよさについて伝え合う。**	**比 １人１台端末の画面越しに、両地域の伝統や文化について、類似点を伝え合う。また、良くなっている点を伝え合う。** **振 発表の伝わり具合を、「みんなで作る伝える力」を使って振り返る。**	**同期型**
8	県内の主な文化財について確認し、自分で調べたいものを決める。	振 振り返りの記述を写真で撮影して共同ツールに保存し、共有する。【全時間】	非同期型
9	県内の主な文化財について、自分で調べ表現する。		
10	個々が調べたものを見比べ、意見を伝え合う。		
11	地域に古くから残るものを受け継ぐために自分たちができることを考える。		

話 ・・・ 伝え方の工夫を話し合う活動　　比 ・・・ 自他の表現を比較する活動
振 ・・・ 伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動

本単元のねらいは、地域の伝統や文化について調べ表現することで、伝統や文化には人々の願いや受け継ぐための努力があることを理解し、保存や継承に対して自分たちのできることを考えられるようにすることである。そのために、調べた内容についてスライドを用いた音声を含む発表資料としてまとめ、伝えることとした。発表資料を作成する班の構成は、全10班（原籍校５班：３人程度、相手校５班：５人程度）とした。そして、発表資料は、共同ツールに保存し、相手校の児童と互いに見合い、質問し合う場を設定した。そうすることで、相手に十分に伝わっていないことに気付き、より伝わりやすいように調べ直し、工夫・改善を行うことができると考えた。その後、再度互いの発表を見合い、類似点を見付ける場と発表のよさを伝え合う場を設定した。この活動を通して、異なった地域の伝統や文化でも同じように人々の願いや受け継ぐための努力があることに気付くことと、自他の発表を比較しながら伝わりやすい表現の工夫について考えることができることを意図した。

(ｲ) 授業の実際

同期型の授業は、１時間目、５時間目及び７時間目の３回実施した。１回目の同期型の授業では、共同ツールを使い、相手校の地域の伝統や文化について知っていることを出し合う活動を行った。同じ防府市内の学校であっても、他地域の伝統や文化はあまり知らないようであった。その上で、今度は自分の地域の伝統や文化について、相手校の児童に伝えるように促した。すると、児童は自分の地域の伝統や文化についても、由来や行い方、そこに込められた思いや願いなどの知識をもっていないことに気付いた。そこで、相手校に自分たちの地域の伝統や文化について調べたことをスライドに音声を入れてまとめ、発表するという単元のゴールを設定し、見通しをもって学習を展開できるようにした。

２回目の同期型の授業では、前時に見合った発表から感じた疑問点について、班ごとに分かれて１人１台端末の画面越しに直接質問をする活動を行った。質問されたことを基に、発表資料の修正をそれぞれで行った。３回目の同期型の授業では、再度互いの発表を見た後、１人１台端末の画面越しに互いの地域の伝統や文化について類似点を見付けて伝え合う活動と、相手の発表で良くなっている点を伝える活動を行った。

ａ　伝え方の工夫を話し合う活動

地域の伝統や文化について調べて発表資料を作成する中で、児童から相手に分かりやすく伝えるための気付きが出てくると考えた。そのタイミングで国語科として伝え方の工夫を話し合う活動を仕組んだ。

第１回授業実践と同様に、話合いから出てきた考えを基に「みんなで作る伝える力」に加筆修正を行った。また、加筆修正されたものを児童が共同ツールで確認ができるようにし、発表を見比べたり、発表資料を改善したりする際の視点にするようにした。第２回授業実践で作成した「みんなで作る伝える力」を**表８**に示す。

表８　みんなで作る伝える力（第２回授業実践後）

新聞づくりで見付けた力（第１回）	発表資料づくりで見付けた力（第2回）
・相手が読める字を書く。（きれいな字を書く。） ・相手の気持ちになって書く。 ・相手のこと（意見など）を聞いて書く。 ・文字の大きさや太さを考える。 ・絵や図、写真、表などを入れる。 ・くわしく書く。 ・見出しを工夫する。 ・分かりやすい情報を書く。 ・バランスのよい配置（わりつけ）にする。 ・見出しに伝えたいことをまとめる。 ・事実を書く。	（スライド） ・文字の大きさを使い分ける。 ・大切な言葉に色を付ける。 ・説明に合った写真やイラストを使う。 ・短い言葉で説明する。 ・デザインをそろえる。 ・動きを動画で伝える。 （音声） ・大きな声で言う。 ・はきはき話す。 ・適切な間を取る。 ・ざつ音が入らないようにする。

b　自他の表現を比較する活動

自他の表現を比較する活動は、４時間目に非同期型で、５時間目と７時間目に同期型で行った。４時間目は、共同ツールに保存された相手校の発表を見た後、よく分からなかったことや疑問に思ったことについて、共同ツールを用いてコメントした。

２回目の同期型である５時間目は、前時に質問した内容の中で特に伝えたいことを班ごとに分かれて１人１台端末の画面越しに直接質問をする活動を行った。質問されることで、今の発表では伝わっていないことがあると気付いた。また、答えることができない内容があることから、調べた内容が不十分であることに気付いた。この活動を行うことにより、発表資料を修正する必要性を認識することにつながった。

３回目の同期型である７時間目に、再度互いの発表を見合って意見を伝え合った結果、児童はどの地域の伝統や文化にも、人々の願いや受け継ぐための努力があることを感じ取った。また、それぞれが発表資料を修正した後の発表を見合ったことで、表現の工夫・改善が相手に分かりやすく伝わることにつながると気付いた。

c　伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動

同期型の５時間目と７時間目には、自分たちの発表の伝わり具合について振り返りを行った。２回目の同期型の５時間目は、「みんなで作る伝える力」と相手校から発表に対して質問されたことを基に伝わり具合を考えた。その上で、自分たちの発表が相手に伝わりやすくなるための改善案を考え、６時間目の発表資料の修正につながるようにした。

３回目の同期型の７時間目は、再度行った発表の伝わり具合を考えた。修正したことで良くなった点を伝え合ってから行い、伝わり具合が改善されていることを児童が自覚できるようにした。

(ｳ) 授業実践の結果と考察

a　児童の振り返りの記述の分析

38人中37人の児童から、伝える意欲の高まりに関する記述の変容が見られた。２回目の同期型の５時間目では、伝わりずらかったことを受けて、38人中29人が再度調べる必要性を記述した。このことから、分かりやすく伝えようとする意欲の高まりが見て取れた。３回目の同期型である７時間目では、38人中22人が地域の伝統や文化についての気付きを記述しており、類似点を伝え合うことで伝統や文化に対しての知識の深まりがあったと考える。５時間目と７時間目の児童の記述の一部を**図８**に示す。

５時間目	この勉強で発表資料が良くできていると思っていてもやっぱり一回で完ぺきにはできていないんだなと思いました。なので次は、タブレットや本で調べて相手の小学校にわかるように改善していきたいです。
	小野小学校との交流学習では、答えられる質問が３つあって、答えられなかった質問が１つあったので、次の交流学習では、答えられない質問をゼロになるように調べたいです。
７時間目	今日の学習で分かったことが二つあります。一つ目は、またもう一度見直したらたくさんやり直すところがあったんだなと思いました。二つ目は、もう一回作ってみたら、たくさん似ているところがあるんだなあと思いました。そして、両方の地区の伝統や文化にいいところがあるんだなあと思いました。
	小野小学校の人たちに、よく伝えることができたと思う。小野小学校の人たちが作った腰輪踊りのこともよく分かった。腰輪踊りは笑い講と似ていたところが２つあった。１つ目は、人々の願いが似ていた。２つ目は、曜日が似ていた。同じだったところは、両方、かねを使っていた。

図８　５時間目と７時間目の児童の振り返り（一部抜粋）

また、変容を客観的に見取るために、第１回授業実践と同様にテキストマイニングを行った。抽出語の分析については、「相手」「分かる」という言葉を使っていた児童は、１回目の同期型である１時間目（**表９**）より３回目の同期型である７時間目（**表10**）の方が増加した。また、１時間目にはなかった「改善」という言葉が多く出現した。これ

表９　１時間目の振り返り記述の抽出語

N＝38［原籍校(n=15)，相手校(n=23)］

	抽出語	数		抽出語	数		抽出語	数
1	相手	28	6	知る	17	11	伝える	14
2	分かる	28	7	伝統	17	12	地域	13
3	小学校	27	8	文化	17		（省略）	
4	書く	22	9	人	15	23	本	5
5	調べる	20	10	自分	14			

抽出語　23語句　　合計回数　308回

表 10　７時間目の振り返り記述の抽出語

N＝38［原籍校(n=15)，相手校(n=23)］

	抽出語	数		抽出語	数		抽出語	数
1	分かる	48	6	人	21	11	書く	11
2	相手	47	7	思う	17	12	動画	11
3	小学校	45	8	似る	15		（省略）	
4	改善	25	9	自分	11	38	良い	5
5	発表資料	22	10	質問	11			

抽出語　38語句　　合計回数　443回

らから、相手に分かりやすく伝えるために表現を改善しようとする意欲の高まりが見て取れる。

共起ネットワークの分析については、抽出語で多く、伝えることに関わりがある「相手」と「分かる」に注目した。

１回目の同期型である１時間目（**図９**）は、「相手」につながりの強い語句として、「小学校」「知る」「地域」「教える」などがあり、「知る」を中心としたつながりから、自分や相手の地域について知りたい思いが強いと読み取れる。また、「人」「分かる」のつながりが強いことから、分かるように人へ伝えたい思いが強いことが読み取れる。

２回目の同期型である５時間目（**図10**）は、「相手」につながりの強い語句として、「小学校」「質問」「思う」「答える」があり、「分かる」は共起ネットワークに出現しなかった。特に「質問」は、「相手」に重なるほどつながりが強く、質問し合う活動を行ったことが児童の印象に残ったと推察される。３回目の同期型の７時間目（**図11**）は、「相手」につながりの強い語句として、「小学校」「分かる」「改善」「思う」などがあり、「分かる」と「改善」は重なるほどに強いつながりとなっている。このことから、相手の発表の改善によってよく分かるようになったと感じていることが読み取れる。

三つの共起ネットワークの変容を踏まえて、質問し合う活動を行ったことで、発表資料を伝わるように改善し、相手によりよく伝わる発表になったと推察される。

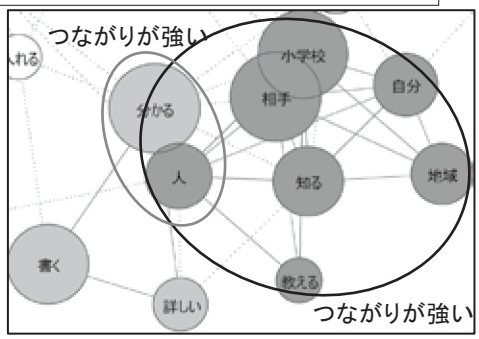

図９　１時間目の共起ネットワークの一部

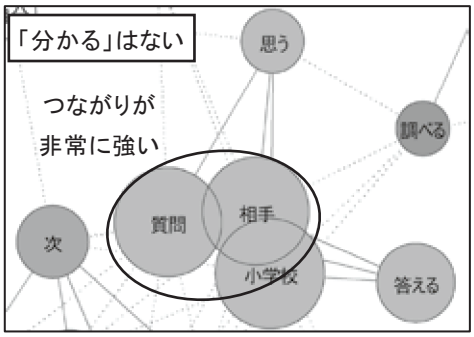

図10　5時間目の共起ネットワークの一部

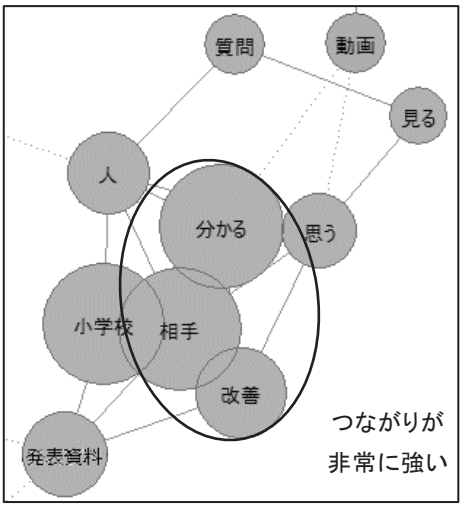

図11　7時間目の共起ネットワークの一部

b　児童の発話・行動記録の分析

同期型の授業の伝え合う活動として、班ごとに分かれて１人１台端末の画面越しに意見を伝え合う場を設けた。そうすることにより、第１回授業実践より多くの児童が発言する機会を得ることができた。児童同士のやり取りが増えたため、伝える意欲の高まりが感じられる発言や行動がいくつも見られた。その顕著なものとして、３回目の同期型である７時間目でのやり取り（**図12**）を例に述べる。

図12中の下線部「聞こえますか」「伝えていいですか」などの発言から、聞き手であ

る相手の反応を大切にしていることが分かる。また、うなずき、ジェスチャー等を積極的に行っており、聞き手としての意識が高まっていることも見て取れる。

そして、**図12**中の網掛け箇所のように、「テキストに打ったので見てください」と発言し、１人１台端末で文章を打ち込んだものを相手に見せて伝えていた。この伝え方は、前時に相手の発言が聞こえにくく伝わらなかった経験から、相手に何とか伝えようと児童自らが考えて行った工夫である。これらは、相手に分かりやすく伝えようとする意欲が向上し、実践する態度として表れたものと考えられる。

A:原籍校児童　B:相手校児童
B　聞こえますか？
A　はい、聞こえます。
今から、似ているところを伝えます。
テキストに打ったので見てください。
B　お～、そうですね。
似ていますね。（うなずく）
今度は、こちらが伝えていいですか。
A　ＯＫです。（さらに、指でＯＫのジェスチャー）
B　僕たちが見つけた似ているところは、人々の願いが似ています。
A　（うなずく、音の出ない拍手）
B　他にありませんか？
A　ずっと昔から続いていることです。
※（ ）内は、その時に見られた行動
下線は、相手を意識した発言

図 12　７時間目の児童のやり取り

c　表現物の分析

第２回授業実践で児童が作成した発表資料（**図13**）について、「みんなで作る伝える力」の14項目に基づいて分析した（**図14**）。質問し合う前の発表資料と、５時間目に質問し合ったことを受けて修正した後の発表資料において、各班が達成した項目数の平均を比較した。修正後の平均値は11.1、標準偏差は1.83であり、修正前の平均値は7.8、標準偏差は1.45であった。Wilcoxonの符号順位和検定の結果、有意確率p=0.005であり、有意水準0.05より小さいことから、修正後は修正前と比べて有意に増加したと判断できる。また、どの班も１項目以上増えていたことからも、質問し合った後に発表資料を修正したことで、内容が伝わるように改善がされていたと分かる。

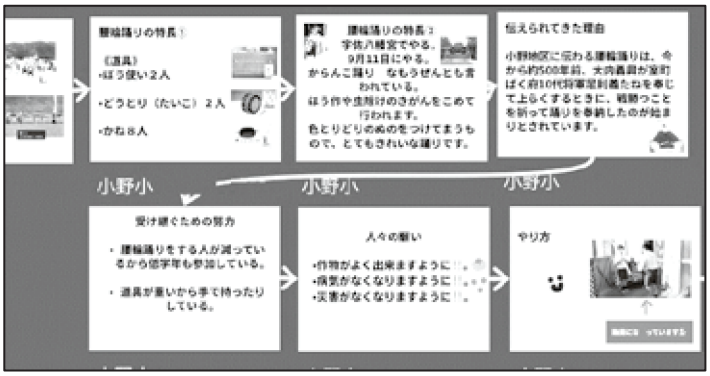

図 13　児童が作成した発表資料（一部抜粋）

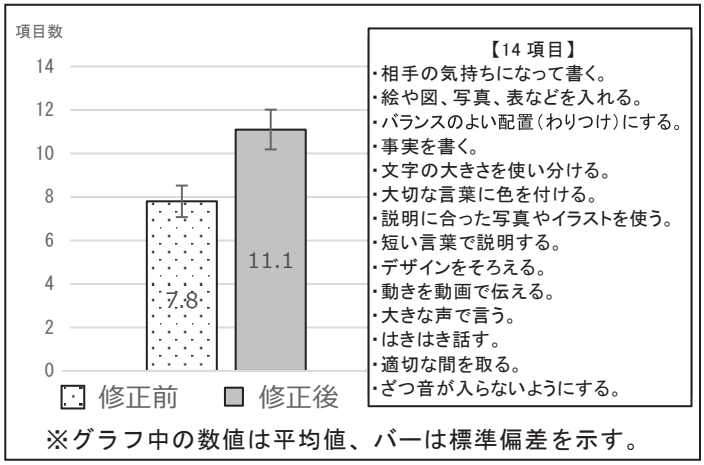

図 14　発表資料において達成した項目数の平均値

また、伝統や文化について、修正した後の発表資料の内容で取り上げられていたかについても分析した（**表11**）。「伝統や文化の特徴」「地域の人々の願い」については全ての班、「受け継がれてきた理由」は10班中８班、「受け継ぐための努力」は10班中７班と、多くの班が取り上げていた。第１回授

表 11　発表資料で内容を取り上げているかの分析

取り上げてほしい内容	原籍校					相手校					計
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
・伝統や文化の特徴	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10
・受け継がれてきた理由	○	○		○	○	○		○	○	○	8
・地域の人々の願い	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10
・受け継ぐための努力	○	○	○	○	○		○		○		7

業実践で課題となっていた調べた内容を詳しく伝えることに関しても一定の成果が出たと考えられる。

(6) 研究の成果と考察

２回の授業実践後、遠隔合同授業についての感想を記述するアンケートを行った。39人中35人が「発表が苦手だったけどできるようになった」「恥ずかしがらずに話せるようになった」など、伝える意欲の向上が見て取れる記述をしていた。児童自身が、伝える力の高まりを自覚できていたことが分かる。また、「（相手校の児童に）『ちょっと待ってほしい』と言ったら『いいよ』と優しく言ってくれて、とても嬉しかった」という記述があったことからも、相手を意識してやり取りをすることの大切さに気付いたことが分かる。遠隔合同授業において伝え合う活動だからこそ、相手を意識するように態度が変容したと考えられる。

また、授業実践における児童の姿からも、相手に分かりやすく伝えようとする行動が多く見られ、伝える意欲の高まりを見て取ることができた。具体的には、遠隔合同授業だからこそ有効であると考えられる、音の出ない拍手や１人１台端末でテキストカードに打って見せる方法など、児童自らが伝え方の工夫を考えて作り出していったことなどが挙げられる。

以上のことから、本研究では、児童の伝える力を高めることができたと考える。

３　研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

遠隔合同授業における児童同士の伝え合う活動において、児童に身に付けさせたい力を相手校と共有した上で学習過程の工夫を講じることは､児童の伝える力を高めることに効果的であった。遠隔合同授業を行うことで、相手校の児童に自分たちのことを分かってもらいたいとの思いから学習意欲が高まった。また、日常的な交流活動が多くないことに加え、直接対面しない相手に対して、どうすれば分かりやすく伝わるのかを試行錯誤することで、児童の思考が活性化され、児童の伝える力を高めることにつながった。さらに、自分たちの学校だけでは気付くことのできなかった表現の仕方や伝え方の工夫にも気付く機会につながった。

(2) 今後の課題

本研究の２回の授業実践は、同一市内にある大道小学校を相手校として、複数回にわたり遠隔合同授業を実施することにより、児童の伝える力の高まりを見取ることができた。今後は、校種、地域及び学校規模を変えた場合の遠隔合同授業においても、児童の伝える力を高めることができるかについて検証するとともに、他校との合同学習の在り方、とりわけ遠隔合同授業の在り方について、実践研究を進め、より効果的な方法を探っていきたい。そうすることで、様々な人と関わり、多様な考えに触れる機会を創出し、原籍校の児童の伝える力を更に高めることにつながると考える。

【引用文献】

＊１，＊２　文部科学省，『第３期教育振興基本計画』，2018，p. 84

＊３，＊４　倉田伸，「第 12 章　ＩＣＴによる学びの保障・遠隔授業の可能性」，稲垣忠・佐藤和紀（編），『ＩＣＴ活用の理論と実践　ＤＸ時代の教師をめざして』，北大路書房，2021，pp85-86

＊５　文部科学省，『遠隔教育システム活用ガイドブック　第３版』，2020，p. 4

＊６　樋口耕一・中村康則・周景龍，『動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニングーフリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析－』，ナカニシヤ出版，2022，p. 39

【参考文献】

・文部科学省，『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』，2018

・樋口耕一，『社会調査のための計量テキスト分析　第 2 版』，ナカニシヤ出版，2020